

理学部か工学部か、就職か研究か

瀧川 晶 (理学部)

工学部に進むつもりだった。高校生で進路を考え始めたときも、理科一類の1年生のころも、理学部はとても専門的で理系科目が大好きな、「特別な人」が進む学部であるように思っていた。理系科目は好きだが、もっと得意な人は山ほどいることを知っていて、とても自分が同列にいるようには思えなかった。私の父は企業のサラリーマンで、母はパートで中学受験の塾の講師をしていた。私だったらどんな会社で働きたいか、と考えることはあった。しかし、研究者が進路のひとつだなどと考えもしなかった。だから、工学部に進み、大学か大学院を卒業して、大きな企業かベンチャー企業に就職して働くつもりでいたのだ。ところが、私は進振り（今の進学選択）で理学部の地球惑星物理学科を選び、大学院を経て研究者になった。

現在の私は、銀河系における物質循環を研究して、一世代前の恒星から太陽系形成までの歴史を明らかにしたいと思っている。特に、星が死ぬ際に放出するガスから宇宙塵と呼ばれる鉱物などの固体微粒子ができる過程を、実験や隕石の分析、観測を組み合わせることで研究することに力を注いでいる。研究が進むことは、すこし大袈裟にいうと、自分の手で太陽系の歴史を拡大していくようなもので、どんな結果も面白い。この内で、私が進振りのときにも興味があった要素は、わずかに「宇宙」だけだ。

高校生の私は、理系の中から何かを選ぶなら、宇宙がいいなと思っていた。宇宙とって頭に浮かぶのは、月や宇宙ステーション、宇宙飛行士だった。火星とか木星とか、星も銀河も、そういうものはよく知らないし、遠すぎて、自分が取り組めるようなイメージもわかなかつた。夜ふかしをしたある日、たまたま点けたテレビで、スペースシャトルが地球に着陸する瞬間を中継していた。宇宙から帰還したスペースシャトルにたちこめる陽炎がとても美

しかった。何かを作ることは好きだったので、宇宙にいくためのロケットやスペースシャトルを作れたら楽しいだろうと思った。それで工学部の航空宇宙学科に進むつもりでいたのだ。ところが、航空宇宙学科に進んだ高校の友人に様子を聞いてみると、「計算ばかりでつまらない」というなんとも悲しい返答が返ってきた。そうか、つまらないのか、と短絡的に認めてから、違う進路を探し始めた。いま、航空宇宙学科のWebページをみたら、非常に楽しそうである。アドバイスをくれた友人は、大学院を経て大企業の凄そうなポストを渡り歩き、起業をして、大活躍している。相性の問題だったのだろうと、すこし腑に落ちた。振り返ってみると、私の頭には、航空宇宙に進むために必要な、高い進振りの点数がちらついていた。つまらない、という投げやりな言葉は、勉強からのちょうどよい逃げ道となったのだろう。

違う進路を探し始めたちょうどその頃、研究者という職業についても考えるようになっていた。今では私の夫となった人は、同級生で文科三類にいた。彼の父親は経済学の研究者で、初めて見聞きする、「研究者がいる家庭」が、私の家族とあまり変わらなくて驚いた。とりとめのない会話が交わされて、ニュートンに住み、子供が二人いて、陽気な犬もいた。ロールモデルの欠損が解消され、研究者が進路のひとつに加わった。

駒場2年生の春の進学ガイダンスで、たしか、工学部のシステム創成学科の話聞きに行き、そのあと地球惑星物理学科を見に行った。地球惑星物理学科のガイダンスで誰が何を話したかは全く覚えていないのだが、「地球や惑星そのものを研究して生きている人」がいたことは強く心に残っている。理学部の教員も、私が想像していたよりずっと「普通」だった。航空宇宙もまだ視野に入れていたのだが、「宇宙に行く手段を研究する人」と、「宇宙そのものを研究する人」を並べてみて、後者の響きに心を打たれた。それで地物に進む心が定まった。そのとき、研究者か就職か、どちらにしたいかは決まっていなかった。それから2年がたって、大学4年生になったころには、企業に就職する気持ちは消え失せて、

もう夢中になって研究をしていた。

星や石が大好きな子供時代を過ごした、いわば生粋の地球惑星科学者は多いが、私にはそんな思い出はひとつもない。私が小さいころにすごいと思った宇宙は、北海道の星空で、それでも、空に輝く点々は、美しい以上でも以下でもなかった。石をみたことはあったが、どうやってできたかなんて考えたこともなかった。星や石をみても、綺麗だな、の先に最初に何を尋ねていいかもわからなかった。自分の名前の「晶」という漢字は水晶の晶だ、と自分で説明してきたのに、水晶とはどんな物質であり、どこでどうやってできたのだろう、と考えたことがなかった。好奇心と疑問をもつのは、簡単なことではないのだ。ところが、理学部に進んで、研究者になって、今の私は、世界のどんなことに対しても、なぜ、と尋ねてよいのだと信じている。むしろ、疑問を見つけることこそが喜びだ。いつのまにかそうなった。理学というものに向き合って、普通というには語弊がある、たくさんの個性豊かな研究者に囲まれて、見える世界はすこしずつ変わっていった。

20歳をすぎて、学部3年生の冬、地球惑星物理学実験という授業を受けていた。いくつかの中から、私は隕石の中のCAIという物質を作るテーマを選んでいた。CAIというのは、CaやAlに富む難揮発性包有物のことで、平たくいうと太陽系で最も古い鉱物である。どのくらい古いかというと、年代測定から45億6千7百万年前に形成したことがわかっている。地球など影も形もないころだ。初めて覗く偏光顕微鏡で、隕石薄片の中にあるメリライトという鉱物を見せてもらった。今、この目の前にある薄灰色の奇妙なものが、46億年前にできた鉱物だ、という事実が心に湧き立った。そして、そんなものを自分で作ることができる、という事態に感動した。それから20年くらいかけて、ゆっくりと、単なる石たちは少しずつ意味のある鉱物になっていき、点々だった星は、太陽系や地球とつながる銀河系の構成要素であり、ダイナミックな物質のゆりかご、と思わずにはいられないように変わっていった。7歳の時にみつけてもよかった自然への興味をうっかり見逃した私

は、20歳を過ぎてそれを見つけて、さらに20年かけて成長させたのだ。もはや私も、星や石好きな年少少女の一人だと自負してよいだろうか。

毎年5月に海浜幕張で、地球惑星科学分野で最大の学会が開かれる。「連合大会」と通称される地球惑星科学連合大会は、地球惑星物理・環境学科に進学した学生にとって、初めて参加する学会となることも多い。学部生は無料で参加できるので、気楽に地球惑星科学の幅広さと奥行きを覗くことができる。ぜひ、心踊るなにかをみつけてほしい。この連合大会の時期に合わせて、何年かに一度、地球惑星物理学科の同級生で同窓会をしている。卒業して15年以上たつのに、今年も12人が集まった。30人ほどの学科で、タイミングが合わない人もいれば、海外にいる人もいるので、随分と集まるものだと思う。大学のときは、海や気象、地震、宇宙、みんなバラバラのことを研究していた。今年その場にいたうちの3人は研究を続けていて、他の皆は色々な企業で働いている。一人は大学院を出たあと、外資系の企業で営業職を極めて社長になったらしい。気象分野の専門を生かした企業で働き、夫婦でフランスに異動になったという同級生は、惑星科学の研究者としてフランスで活躍する別の同級生とご近所になるそう。文系から就職しそうな仕事も理系っぽい仕事もあって、苦労話も華々しく活躍している話も、それぞれの話を聞くのがとても面白い。そういうとき、違う自分を想像する。もし、航空宇宙に進んでいたら、どこかの企業で楽しく働いていたのではないかなと思う。もしかしたら、ロケットを作る研究者になっていたかもしれない。だからこそ、理学も工学も、企業で働くのも研究者も、そんな枠組みはささいなことだ。選択なんてどっちでもいいのだ。選択した瞬間に決まることなんてごくわずかで、良いも悪いもない。どんなに望んだ進学先でも、自分の選択に真剣に向き合うことができなければ、それは良い選択だったといえるだろうか。全ては選択した、その後だ。